

はじめに

フィンランドは日本よりやや小さい国土に約五五〇万人が住む国である。テキストイルのマリメッコ、ガラス食器のイッタラ、アアルトの建築など、人気の北欧デザインを支える美術教育には定評がある。また、OECD加盟国による十五歳の読解力を測る国際学力テストPISAで、常にトップグループにいたる教育先進国であり、世界中から教育関係者の視察が絶えない。

日本では美術教育は、授業時間数削減の瀬戸際に立たされている。フィンランドの美術教育の現場はどうなっているのか、そして美術館はどのように学校と連携しているのかを見るため、美術館三館と学校三校、教育庁を訪ねた「註1」。

## フィンランドの教育制度とATC

フィンランドでは大学院まで教育費は基本的に無料である。七歳になる年に入学する九年一貫性の基礎学校に加え、二〇一六年より六歳児の就学前教育も義務化された。日本の学習指導要領にあたるナショナル・コア・カリキュラムの最新版（二〇一四年）で見ると、美術教育は「視覚芸術」と「クラフト」の二教科が必修で、さらに選択

授業として追加することもできる。

教科調査官ミッコ・ハルティカイネンは、「すべての生徒はユニークな存在であり、質の高い教育を受ける権利がある」と強調する。これを裏付けるように、少人数のクラス編成や設備の充実、教員の質（修士号が必要、給与が高く勤務時間は短い）が確保されている。実際に九年生のクラフトの授業を参観すると、十五人程度の生徒が、旋盤や金属加工ができる広いスタジオで、各自の卒業制作に取り組んでいる様子が見られた。教員によると「これ以上生徒数が多いと危険だし、個別に指導できない」ということである。視覚芸術の授業でも、話し合ったり調べたりする時間が充分にあり、全体的にゆとりをもって進められているようだ。

さて、今回の視察中、最大のトピックはアート・テスター・キャンペーン（以下ATC）、



3Dプリンタまで揃えた教室で、作りたいものを作る9年生

註2）という国を挙げたの芸術助成事業であった。フィンランド文化財団が建国一〇〇年を記念して、二〇一七年から三年間、全国の八年生（中学二年生）六万人を、博物館、劇場、コンサート、オペラなどに無料招待するものだ。訪問先は、地元と首都圏の文化施設の二箇所。交通費（必要なら航空運賃も）も支給される総費用二千万ユーロ（二十七億円）のビッグプロジェクトである。プログラムには、ワークショップやアーティスト訪問などによる事前事後授業や、教員向けテキスト、生徒が感想を投稿するSNSも含まれる。私たちが訪問したのは、まさにATCがスタートする月であった。

## 国立アテネウム美術館

首都ヘルシンキ市にあるアテネウムは、一八世紀半ば以降のフィンランド美術を所蔵し、今年で四千人を受け入れる。

「今日が初日なの。ガイドはベテランを当てたから大丈夫だと思っけど、同行してチェックしないと」。パブリック・プログラム責任者のサトゥ・イトコネンは、時間を計りながらしきりにメモをとっていた。展示室とアトリエでは、フィンランド中部から来た八年生が十五人ずつに分かれ、ガイドの進

行に従って鑑賞している。ギャラリートークは日本でも行われている対話的なスタイルである。肖像画の展示室で「つきあいたい人物」を選びその理由を述べたり、吹き出し型付箋で人物のセリフを考えたり。「八年生は自分からは美術館にこない世代。ATCはともありがたい」とサトゥは語る。

ホームページでは、通常の学校向けガイドツアーと新コア・カリキュラムの対応リストが明記されている。特に、美術以外の教科、たとえば国語や外国語、歴史、国家アイデンティティ、文化遺産や宗教、環境学や生物学の授業でも、美術館を活用できるとアピールしているのは、国立美術館らしいといえるだろう。

## 国立現代美術館 KIASMA

「国立美術館はみんなのもの。旅するように、散歩するように、心地よい美術館体験をしてもらいたい」と、パブリック・プログラム責任者ミンナ・ライトゥマーは熱弁をふるう。来館者の六十五パーセントが三十五歳以下という若者に人気の美術館だが、「みんなのもの」というだけあって、あらゆる層に向けた配慮がある。たとえば展示室内の解説パネル。多言語表示はもちろんのこと、

「十二歳で理解できるレベル」を基準とし、フェイスブックで募集したボランティアがレベルチェックしている。たとえばトイレのサインは男女が並ぶデザインであり、LGBTも人目を気にしないで入ることができる。ジェンダーフリートイレとなっている。

イベントもダイナミックである。八月最後の金曜日の夜、徹夜で行われた「哲学」イベントには、ヨーロッパ中から哲学者三十人が招かれ、対話やパフォーマンスに五十人が集まった。八月には、ヘルシンキ市教育局とタイアップして市内の二年生四千人を招待する屋外ワークショップも行う。もちろんATCでもアテネウムと同じく全国から八年生四千人を受け入れる。

アトリエは比較的小さいが、一年間ですべての年齢層に対応する内容を順に行えるよう計画され、年間約五千人が利用する。平日午前は学校受け入れ、週末は大人向けプログラム、その合間を縫って幼児プログラム（一〜四歳）や、なんと食べられる絵の具を使った乳児プログラム（月齢三カ月）まであり、「みんな」の徹底振りがうかがえる。

## エスボー市立近代美術館 EMMA

エスボー市は首都ヘルシンキに隣接するフィンランド第二の都市で、アアルト大学やノキア本社のある豊かな自治体である。五千平米のギャラリーを持つEMMAの教育サービス部門は、年間一万五千人が参加

するガイドツアー、四千人が参加するワークショップ、二万人が参加する六十回のイベントを運営している。部門責任者のレーッタ・カロヨは、「この数年、特に学校との連携が増えてきている。国内どこもそう」と語る。

EMMAはATCの「地元の文化施設」枠で、五〇〇人の八年生を迎える計画を立てている。プログラムは、①アーティストが学校で行う事前授業、②美術館訪問（三時間）、③事後授業（発表、美術展、パフォーマンス、ビデオ、アーティストとのスカイプなど）の三部構成になっており、このうち②を視察することができた。地元の八年生五十人が四グループに分かれてギャラリートークを受けている最中、四つの作品前に用意された大きな紙に付箋紙を貼って投票するという興味深い動きがあった。実は付箋紙の色によって、社会的なもの（青）、個人的なもの（ピンク）、プロセスに注目したもの（オレンジ）、素材に注目したもの（緑）



長距離の交通費も支給され、地方からアテネウムにやってきた八年生



KIASMAのアトリエには、アアルト大学などから人材が派遣される

という意味があり、作品への自分の考えを表明する活動であった。美術館では、事前授業で会ったアーティストとも再会し、本人から作品の説明を聞いたり質問したりもできる。このような丁寧な複数回授業は、地域の美術館ならではの取り組みだといえる。

## おわりに

短期間の調査ではあったが、学校や教育庁も訪問できたことで、現在のフィンランドの美術館教育を立体的に捉えることができた。対話によるギャラリートーク、ナショナル・コア・カリキュラムへの対応、教科横断型の学び、オンラインの活用は、これまで調査した米国、豪

州、オランダ等と同様で、世界的な潮流といえる。

特にフィンランド的なのは、やはり北欧型の税制に支えられた豊かな教育財政と、子どもをみなが育てようとする社会制度であろう。その象徴が、EMMAに隣接し



EMMAで寛ぎながら鑑賞の振り返りをする八年生



エスボー美術学校の校長によるプレゼン。どれだけ多くの組織と連携しているかがわかる。

たエスボー美術学校という放課後学校である「註3」。ここには、五歳から二十歳まで一四〇〇人の子どもたちが、絵画やテキスタイル、陶芸、写真、CGなどを専門家から学ぶためにやってくる。どの子もひとつは放課後学校に行き、好きな分野を伸ばすことができるよう、市や国が財源の半分を負担する。このような施設が市内に十一箇所あるという。この国で子育てしてみたいと思わずにはいられない調査となった。（企画課主任研究員）

## 註

1 科学研究費（平成二十八〜三十年度基盤（B）23300315、代表・一條）による調査。平成二十九年九月十七日〜二十四日。同行者は奥村高明、東良雅人、寺島洋子。

2 <http://skri.fi/en/cultural-activities/art-testars>

3 詳しくは、奥村高明「放課後スクールの充実―エスボー美術学校の調査報告から」<https://www.nichibun-g.co.jp/column/nanabito/art062/>